針葉樹會報

通卷第九十號

春山特輯

城峯山

高橋要二

會社で机を並べて居る同僚が天長節と日曜の連休に何處かへ登らないかとの提案である。勿論双手を擧げて賛成したのであるが、扨どの山へと云ふ現實の問題になると簡單な樣で却々定まらない。第一近頃の新聞を見ると列車に乘る事自體が容易ならぬことの樣であり、特に中央線とか東海道線、上越線等に至つては殺人的雜踏を覺悟しなくては到底目的地迄はこんで貰ふ譯に行かない。つい先達ての會報にもペンちやんが汽車のデッキに立つた儘上野から土浦迄寒風に吹曝されたと云ふ記事が載つて居たが、確かに他人事と許り思へない。で第一條件として成る可く人間の來さうも無い處をと選んだ結果中央線の山は勿論オミツト、上越、東海道沿線も敬遠して最後に神流川の流域なら可からうと云ふ事になつた。處で神流川を中心とする山旅と云つても十石越えも面白さうだし、濱平鑛泉に一泊して梓山へ抜けるプランもやつて見たい。乃至赤久縄、御荷鉾、叶山も惡くない等とあつて散々迷つたが、結局城峯山を越えて万場に一泊し、翌日御荷鉾か赤久縄と云ふ平凡な處に落付いて了つた。城峯山は最近東武鐵道邊りが大分宣傳して居る樣で、東上線を利用しても行けるが、東上線は如何云ふ譯か餘り蟲が好かぬので、信越線の本庄(若くは新町)からバスを使つて鬼石へ出るコースを選んだ。いよ〳〵目標も定まりメンバーも五人揃つて御膳立はすつかり出來上つた譯だが、出發當日の四月廿八日になつて見ると未明から車軸を流す許りの豪雨である。(寢坊な小生が安眠を破られたのであるから確かに相當な雨量だと思ふ。) とふ〳〵雨は朝になつても降り

やまず完全に一日を棒に振つて了つた。（癪にさわつて仕方なかつたものゝ、素々雨男と定評のある筆者の事であるから山へかゝつてから降らなかつたのが寧ろ見付物であつたかも知れぬ。）が兎に角休みは後一日しか殘つて居ないので第二日目の赤久縄は放棄して了ひ、城峯山行きを決行する事にした。當初の計畫から見ると至極のんびりした旅行になつて了つたが、城峯山は行つて見て後悔する樣な處では無い。何よりも先づ山の靜かなる事が印象深く、或は筆者等の訪れた日が運良くさう云ふ日にぶつかつたからかも知れないが、山で出くわした登山客は東上線を利用して來たと云ふ一人旅の男だけであつた。從つて終始靜かな山の雰圍氣にひたる事が出來た譯であるし、登路として選んだ鳥羽ノ澤林道は落葉松の多い平坦な道であつた。一等三角點のある東城峯の頂上迄ごく緩るい登りであつて、知らず知らず登つて了ふ樣な感じの道である。頂上は餘り廣くない台地になつて居るが、眺望は却々に効く。此處から見る西上州の山は御荷鉾の双峯も立派であるが、赤久縄はズバ抜けて高い。然しそれよりも奥秩父の雄峯に隈なく接し得るのは嬉しき限りであり、波濤と立並ぶ連嶺の偉容は確かに壯觀である。

奥城峯神社は頂上から明るい尾根を一寸降つた處にある。閑雅な社で此邊一帶の村々の信仰を集めて居る樣であり、筆者も途次道を尋ねた折、何かの祈願か代參に行くのかと質問を受けた。

降り路は神社のすぐ上の道を坂原へ出るのが一番近く途中可成道草を喰つても一時間半程と見れば充分である。要するに此の山はステッキ一本持たず、氣輕に出かけられる處で、勿論女子供連れでも時間は充分餘裕がある。本稿の最後に筆者等の所用時間を附記して置いたが、至極のんびり歩いてのタイムと御承知願ひ度い。

針葉樹會員の方で此の方面に御出かけになる方も無いとは限らないから、御參考迄に行程の概要を記して置く。上野發六時廿五分長野行列車で本庄迄行き、驛前からバスで凡そ四十分行けば最近日本ニツケル工場の出來た鬼石町へ着く。鬼石から更に坂原行のバスを利用出來るが、一時間以上待たねばならないので、歩く事にして了ふ。町を外れて彼是一時間許り坦々たる街道を進むと神流川が右に大きくカーブする處に發電所があつて、此處が鳥羽ノ澤の入口である。小生等はこれから山へ入つたのであるが、此の外の登路として、今少し街道について行き叢石橋と云ふのを渡つて入る路もある相である。鳥羽ノ澤入口から東城峯の頂上迄は前にも述べた通り緩傾斜の歩き良い道で、指導標も却々行届いて居る。時間は女子供の足で二時間と云ふ處で、急げば一時間少しあれば可い。從つて前記列車に依れば晝前後には樂に頂上の人となれる。歸途は坂原へ降るのが順路と思ふが、唯御注意願ひ度い事は坂原發鬼石行のバスは終發が五時となつて居て、これに乘りはぐれると乘物の便は至つて少くない處であるから、トラックの御厄介にでもなる外ない事になる。何でもつい最近は七時頃が終發の時刻であつた相だが、ガソリン統制のため止むなく減車して居るのだと云ふ。朝鬼石でバスを降りた際終發の時間を確かめておかれゝば可いと思ふ。

上野發（午前六時二五分）　本庄驛（八時十五分）　鬼石（九時）
鳥羽ノ澤入口（十時—十時半）　東城峯（十二時五十分—三時）

坂原（五時）（五月十二日記）

雪洞より槍へ

根本大

今春の計畫は、最初は大體豫科のメンバーが主體となり部員全部上高地に入り、徳澤班、槍班の二隊に分れ、後者は横尾本谷に天幕を張り、一パーティは更に雪洞もしくは天幕を進めて小槍を一パーティは本谷の天幕より大槍をといふ計畫であつた。ところが始めてスキーを使ふ部員が三、四人ゐたり、又佐藤（光）清水といふ連中が家庭の都合でそれ〳〵不參加になつた事等を考へ、結局部員を二つに分け、一つは八方尾根スキー合宿、一つは人數を縮少して大體前の計畫通り小槍を狙ひ、そしてベンチャン、日江井さんが徳澤生活と云ふ事になつた。

ところが徳澤迄來てみると久保の體の調子悪く、更に横尾から本谷の尾根に天幕を進めるに到り高野が又風邪の爲に下山となりかくして文字通り歯の抜けるが如くぽつり〳〵と本谷の天幕にたどりついたのは、結局山田、根本の二人切りであつた。

三月二十一日　晴後雪　カボックからゴム引シート迄世帶道具一揃を、ルックに積め込んで天幕を出たのが九時。昨日のラッセルの跡をたどつて、無風の尾根から國境線に顔を出した途端に猛烈な飛驒側の風を浴びる。穂高の方は南岳がどつしりと瀧谷を隱し、僅かに肩越しに懐しい北尾根が屏風岩に續いて落ち、北の方は國境線の末端に聳える槍ケ岳が、なだらかな東鎌の曲線を槍澤を緣取つて落し、風さへなければまつたく春日遲々たる好日である。アイゼンには手頃な雪面を、中岳の下りで一寸緊張しつゝ大喰岳に着いたのが十二時半。色々と候補地を物色したが、結局大喰岳頂上附近やゝ穂高より、槍澤側に堀る事にした。雪洞は大體カギ形に水平に堀り込み、入口の通路は高サ約七十糎、間口一米五十糎、奥行二米、内部は高サ八十糎、間口一米五十糎、奥行三米位にした。雪洞を堀つてゐるうちに空模様は次第に怪しくなり、忽ち晴から曇り、更に小雪と變つて行つたが、雪洞の中はまるで快晴の天幕の内みたいな明るさである。時々ぐさつと雪面近くをシヤベルでさすと、何とも言へない淡いコバルト色が滲んで來る。

紺青をえぐりあてふと手を休む

雪洞を堀る事自身は、青の洞門もかくあらん等と思つたりし、相當愉快な作業ではあるが全身雪まみれになり、おまけに坐つて堀るのでトラウザアーの膝が濡れて來るのには弱つた。二時半に落着く。流石に中はしん〳〵と冷へる。シート、カボック、シラフを引き重ね、ラヂウス一台に二人してだきつく樣な格恰で先づ温まる。然し入口をゴム引シートで閉ぢ、全能力發揮の重武裝で一應落着いたが、吐く息は眞白である。三時半零下二度。温度は案外低くないが、濕度の高い故かしん〳〵と冷へる。湯を沸かしても天幕の二倍の時間が掛る。五時に蠟燭をつける。明るい。まつたく明るい。硝子張りの中で電燈をつけた明るさを想像して下さい。二人は今雪の部屋にゐる。一つ一つの雪の結晶が、蠟燭のまたたきに、きら〳〵と煌めく。シヤベルの跡の圓い斜面は、和やかなる橙色の光を放つ。そうだ、小學生の頃讀んだアンデルセンの童話の一節を、雪の宮殿を想像して吳れゝば良い。

壁の曲(クマ)柔く光れり洞凍(イテ)る

ラヂウスの好調が、今の二人にとつては何よりである。カレー粉の匂がたまらなく空腹感をそゝる。鍋の蓋を開けると急に白い水蒸氣が洞内に一杯になり、二人の顏が幻の樣に溫いカレー粉の雲の中に浮ぶ。然しそれも一瞬、忽ち雪の壁に吸ひ込まれ、再び熱のない白い冷光の世界に歸る。六時半二度。燒豚入りのカレーウドンに、漸く頭の先から膝頭までは溫める事は出來たが、足先は依然として凍る樣である。成可く寒さつぶしにと、色々な事をする。山田が黃色いカレーのついた鍋の湯で、こいつは溫いと三日も洗はないコップを洗ひ出す。根本は明日の登攀のパンを作る。

小便に外に出てみたが、雪はどうにか止んだらしいが星一つない眞黑な空、然し二人は勝手に明日は天氣と決める。話は冬籠りの熊の話から羚羊のトラウザアへと移る。八時十五分一度。山田が小便に出る。入口のシートが上る。明るい。「月か」「一寸待て。駄目々々。雪々。紅茶でも飲むさ。」ラヂウスを消しシラフに入り、蠟燭が消へる。春ならぬ雪洞の闇が來る。

春の闇雪面(ユキモ)のこゝに人がゐる

三月二十二日　雪　最高溫度三度　最底溫度零下八・五度。

思ひがけなく寢心地良く、二人共ぐつすり寢る。確かに廣い丈は天幕より取り得である。ところが入口を見ると、僅か上部二十糎を殘すのみである。

周章てゝ起きて、山田がもがくが如く除雪をする。此の除雪はまつたくつらいものである。それは丁度おたまぢやくしがあの寒天狀の塊から始めて水中に飛び出すといつた格恰であり、ラクビーのタックルよろしく二米の雪の中を泳ぎながら外に出る。途端にビューと來る粉雪に、鼻穴が、眼が見へなくなる。それから除雪にかゝるのである。

體もて風成雪の洞を出づ

がつかりして又シラフに入る。十時再び入口二十糎。根本奮鬪す。さて朝食であるが、てつきり明日は天氣と、持つて來た食糧はカレーウドン三把、餅十四、コツペ二本、乾パン三つ、副食物若干のみ、ところが今日の雪である。おかげで紅茶を沸かし、乾パンぼりぐ淋しい朝食が始まる。昨夜食べたカレーウドン三把を取除けば、どう考へても明日は登るにしろ下るにしろ動かればならない。天幕には豐富な食料があつたのだから、當然三日や四日の雪には充分な食料を雪洞に備へる可きであつた。然し高野が去つて以來、四人から二人に減つて受けた精神的な打擊、又未だ癒りきらない風邪の爲の肉體的な疲勞を感じながら、一方一層何となく意地でもといつた樣な氣持が、二人の心を强く占めてゐた。即ち登らうと云ふ意識は强かつたが、山に長く居ようといふ氣持は殆ど消へてゐた。おまけに根本の咳は又甚しくなり、お前の咳は胸からだよ、何んて山田が驚かしたりする。たゞ早く登つて仕舞ひたかつた。この樣に登らう、歸らうの二つが心にあり、從つて食糧も二日分しか用意しなかつたし、雪洞、登攀、歸幕と、何の故障もなく行はれると勝手に決めてゐたのである。おまけに本谷の天幕には誰も居らず、歸つてもシートからカポック、シラフと引き直さなければならないかと思ふと、雪洞に長く頑張る氣には到底なれなかつた。コツペを晝飯に一本づつ食ふ。入

口除雪のアルバイトには乾パン丈ではどうにも腹が承知しない。洞内に便所を作る。天井が低く立つて出來ないので變な格恰をしてやる。それでも外に出る事を思へばまさに極樂である。寫眞を一枚。話の種も切れ、ラヂウスを掴んでむつつり、まつたく消耗する事以外には何もする事がない。時々新雪表層雪崩らしい音がどどと聞へて來る。

雪なだれ激(ゲキ)しシラフの身の嚴(キビ)し

又シラフに入る。五時穴堀り。餅三つが今晩の夕食である。一度入れて又多過ぎはしないかと取出すわびしさ。飽食して天幕で捨てた雜煮が戀しい。食べ終つて又シラフへ。十二時入口除雪。

三月二十三日　風雪

五時半入口除雪に起きる。寢過しては生命に關るかと思へば、流石無精の二人も眼を覺ます。外は相變らず雪。然し何とか考へなければいけない。下りようかどうしようか、ラヂウスをつけながら迷つた。下りるにしろ、吹雪にでもなれば國境線から天幕のある尾根を探すのが困難であらうし、又槍澤側に多く出てゐる雪庇に乘る危險も多分にある。然し食糧も明日、明後日と吹雪かれたらもう續くまい。此位の小雪ならアンザイレンをしたら尾根も何とか見つかるであらうと思つたので、思切つて今日歸幕する事に決心した。シラフをたゝみラヂウスを袋に入れ一通り荷物の出來上つた頃、根本が穴の外に出てみた。ところが何時止んだのだらう雪は止み雲が西から東へ高く低く猛烈な勢で動き、暗憺たる空模樣ではあるが時々太陽が雪雲を透してまんまるく日輪あり

雪洞出で眼鏡にまろく日輪あり

雪雲にまろく日輪みてやすらふ

おどり上つて喜んだ二人は、とにかく大槍丈でもやらうといふ事になつた。山田のサブルックにテルモス、パン、ザイルを入れ十時半に雪洞を出た。國境線に出てみると猛烈な風である。あれ程降つたのに、國境線には一昨日のアイゼンの跡が殘つてゐたのには驚いた。屋根許りの肩の小屋について小槍をみてみると、懸念してゐたトラヴァースも大した事なく、小槍自體にも雪は殆ど無く、これならばと思つたがまあ〳〵此處が我慢のしどころと、空を睨みつけて大槍に向つた。

確保(ジッヘル)のザイルを北風(キタ)の弄ぶ

雪と太陽と風と粉雪の入り混つた中を、山田、根本のオーダーに釣瓶で一時間、大槍の頂上に立つて握手をした時には、曲りなりにも一應やつたといふ何とも言へない氣持であつた。猛然と飛驒側から起つた霧が、雲が、忽ち肩の小屋を蔽つてしまつた。二人して天幕二つ、雪洞一つを進めた丈でも良いさと、慰め合ひつゝ早速下りにかゝる。約一時間で肩の小屋につく。雪洞に歸り荷物を取り、廣い烈風の國境線を今はまつたく風まかせに。

北風(キタ)に膨(ハ)る防風(ヤッケ)着に細き身を委(ユダ)ぬ

四時天幕着。天幕が三日間の風雪にも防風壁のおかげで、まがりなりにもしやんとしてゐたのを見た時は嬉しかつた。(五・六夜)

大澤小屋生活記

久保孝一郎

此の節は物資不足で準備に苦勞する。砂糖、バター等苦勞して入手し、新宿驛に急いだ。(四月四日) 一行大塚、久保、松下、清

水の四名、岩崎、宮城、山田三君に御土産物附きの見送りを受ける。大町からハイヤーで大出に向ふ。金二圓五〇錢とられた。途中角砂糖、番茶を仕入れた。大出の附近は赤松だが奥に進むと落葉松に變る高原的な處である。里で大澤小舍は今冬誰も入つてゐないと聞いてゐたので、如何なる山小舍生活が出來るかと頭に浮べながら、泥んこの道を行く。瀧茶屋に來ると雪がある。此の頃から曇天となつた。大町の工場のサイレンが聞える。やがて雪が降つて來た。服に落ると水になつてしみてしまふ樣な雪である。黑澤を過ぎて間もなく營林署の小舍が見えた。O氏が中學五年の時籠川入りをしたゞけで、他者は皆未知の境である。雪も降るし此の分では畠山小屋泊りかと考へた。白澤を過ぎてから、眼を皿の樣にして捜したが發見出來なかつた。可成り行つてリュックを下しスキーで進み、扇澤の近く迄進んだが不明なので前述の小舍に泊ることゝした。此處は畠中の小舍で山小舍ではない。僕の山日記（昭和十二年版）には畠山小舍が載つてゐるが、新しい山日記には無い事を後で知つて馬鹿見た。翌日も雪でスキーで偵察に行く。扇澤を過ぎて一寸高捲きして澤に降ると山らしい感じがする。岩小屋澤の出合迄行くと、國境線の雲が切れて明日の好天を約束した。山小舍に非る畠中の小舍に三晩厄介になつて綺麗にして出發する。昨日のラッセルを使つて二時頃大澤出合に來た。小舍のある台地の少し手前で澤から台地に上つた。此の邊の積雪量凄く小屋を血眼で捜す。倒木の樣な感じの隆起が小舍であつた。北向きの棟の下部を發見し、少し雪を掻いて覗くと OSAWA・HUTTE と書いた板によつて小舍でわる事を確めた。スコップなくピッケルのみで一時間近く掘つて厭氣のさした頃、Oが羽目板の隙から內部を覗くと、南側と東側も明るいから空いてゐるだらうと云ふので、兎に角小舍を一巡すれば南側の煙出しの下にスコップが置いてあり、東側の窓から入れる樣だ。今迄掘つてゐた北側は廻轉式の扉で一日中掘つても開けられない。スコップで窓迄階段を作る。窓上の屋根に於る積雪量は三米は充分ある。棟の中央が七〇糎、西端も三米以上あつて雪面と區別なく、屋根全體が殆ど平で一見小舍とは見えない。然し大澤寄りの便所は殆ど現はれてゐる。內部にも吹溜りがあるが大した事はない。然し物凄い積雪で小舍がつぶれ相な氣がして落着けぬ。先月から叔母の逝去や、近所に二つ葬式が出たり、而も出發の前夜三日に松高遭難者の春田（中學の一年後輩で而も遭難三日前松高ルンゼ下や德澤で語り合つた）の御通夜があつたりして何だか氣になる。夕食後腹ごなしと稱してSとスコップで屋根の雪を掻いたが、三米もの積雪では氣休めの程度である。O・Mも來て一時間程掻いたが、馬鹿らしくなつて、屋根の上で大の男四人がストームの如くばたんぐ跳れたり躍つたりして、無事であれば可なりと衆議一決して、大騒ぎをしたが直ぐ疲れて厭になり止めてしまつた。ふと空を見上げれば明日の好天を約する滿天の星は人間共の頭上に輝いてゐた。

明けて四月八日、快晴だが好天連續するものと見込み、一應疲勞してゐるのでスキー練習をする。小屋の傍の斜面が良い。十時頃三人程平から峠を越して降つて來た。我々のゲレンデの下で休んでゐたので、彼等の眼前を滑降したら見事轉倒、而も締具を切つて馬鹿みた。陽光のかげる頃上に偵察に行く。赤石澤出合の少

6

し上迄行く。雪崩の小さなのが一寸出てゐるだけである。仲々雪崩は出るものではないと感じるが、萬一遭ったらひどい。翌九日は吹雪で又冬に歸つてしまつた。之以上雪が積られては堪まらぬと思つたが、大して積らなかつた。今日も殘念だがスキー練習。M S盛に轉倒する。自分はどうやら人にボーゲンを教へる樣にはなつた。顧れば豫科一年の冬期合宿に奥又白で仕込まれて以來苦闘實に三星霜、思へば出世したものだと一人で良い氣持になつた。然しクリスチヤニヤは未完成だが、一應一段階に達してスキー練習もたまらない程面白いものでなくなつた。此の度の山行に鋸の工合良く、直徑二十糎位の樹を倒して、焚火の調子が良い。それよりも畠中ならぬ此の山小舍で樹を倒すのは男らしい仕事だ。樵夫は男らしい好ましい職業だらう。

十日は風強く天氣好くなる。Sが用事の爲歸京。八時半出發した。入山以來未だ登つてゐないのでそろ〳〵氣が焦る。后〇時半O・Mが赤澤岳に向つた。自分はせかれる登攀はへばり相で飯を炊く事にした。七時頃黄昏の中に出てヤッホーを叫ぶが返事がない。暗くなつても來ないので一寸氣になつた。何事があつても腹拵へさばかり、冷めかゝつた飯を容器に盛つて、口に入れようとしたが一人の食事の味氣なさに、もう一度懐中電燈を持つて出るとヤッホーが聞え、八時近く歸舍した。稜線に五時頃出て、夕方の立山劔の素晴らしい景觀の話等を聞いて愉快に食事をした。然し懐中電燈も無く急いだのでスキーも充分享樂出來ず、Mは途中でピッケルを落し、而も可成り疲れてゐるので彼は明日休養をしてピッケルを拾ひに行くことゝした。

翌十一日は快晴で、九時半出發マヤクボの下でデポ、スパリ、針木岳のコルに出た。立山、劔の午后の陽光に、蠟の樣に輝く山姿、脚下の黑部の流其の他の景觀は全く感激ものであつた。小スパリ岳迄往復し、針木岳に向ふ。越中側はさあつと落ちて白氷で一寸ステップを切つた。峠に四時半頃着き、小舍の樣子（トタン張りで恐らく一寸の間に合はぬだらう）を見て降る。歸路のスキーは日が蔭つてクラストして不愉快、途中トラーゲンした。然し兎に角素手でも平氣な程惠まれた春山であつた。食料も少く明日の晝食も不充分なので翌十二日里に下る。雪はめつきり減じて里の日射は初夏の如く、河原で顔を洗つたりして、でれ〳〵歩いた。此の時分のアルプス山麓は詩的である。

（附記） 大澤小舍は冬山新人の養成所に良いと思ふ。記錄を見ると大抵小舍は埋つてゐて掘るらしい。「リュックサック」を讀むと、昔はストーブがあつて蒲團を殘して置いたらしい。合宿でもやるには、その位設備をすれば快適な合宿が出來るだらう。少くとも八方尾根より良いと思ふ。

尙籠川入りは扇澤の上を少し高捲きするだけで、上高地入りと比較すれば容易である。

以上

クマ

乙女峠と金時山

四月末の連休を利用して、私の會社の産報會で東山莊へ行く事になりました。東山莊は地圖（五萬の御殿場）にも出てゐる通り東山部落東山湖の南側に位置し、東京YMCAの所有になつてゐるホテル式のヒュッテであります。

男女合計五十名許り、お賑かに東京驛を出て國府津で乘換へ、御殿場に下りたのは丁度三時。それから約四十分許りで東山莊へつきました。私は夕飯まで散歩に行く積りで出ましたら、有志の女性が一人私も行くといふので、彼女と二人で出掛けましたが到々乙女峠の頂上まで登つてしまひました。暗くならない裡にと雨の中を走るやうに駈け下り、どうやら懐中電燈の御厄介にならないで東山莊へ歸りつく事が出來ました。乙女峠と云へば豫科時代に二度踰えたきりでしたから、隨分久振りにその頂上へ立つた譯です。

第二日目は男子二人（一人は加納部隊にも屬してゐた事があり中南支を縱横に荒し廻つた歸還の勇士です）と女子三人（一人は昨日乙女まで跟いて來た子）を引連れて再び乙女峠へ登り、此處から今度は東へ山稜傳ひに金時山へ行きました。ひどい霧で眺望まるで利かず、金時の頂上では焚火を起して晝をたべました。次で昨年秋仙石原の仙鄕樓から獨りで往復した道を下り、仙石の村外れに出て自動車道を姥ヶ茶屋まで辿り、そこから突然降つて來た雹に驚きながら約三十分にして乙女峠の頂上につき、同じ道を東山莊へ歸りました。富士の雪が段々現はれて來、最後には全容を見せて呉れました。

第三日は、今度は私獨りで丸岳へ登つてやれと思つて出掛けたのはいゝのですが、點線道へ這入つてから道を間違へ、エ、まゝよと許り熊笹や茨の密生尾根を突進し右の眼に尖つた笹の先を突込んで血を出したり、手の甲に茨で散々に疵をつくつたりして、やつとの事で本道に出ましたが、その本道も到底素直には通れぬ事を見究め退却と決心して下つてしまひました。所がこの道を乙女峠と眞面目に考へて女二人男三人のハイキングが談笑裡に登つて來るのには驚きました。而もその手には二萬五千の立派な地圖を持つてゐるのに。こゝで人助けをして尾根一つ向ふの本道へ連れて行つてやり、私はそこで別れて東山莊へと歸りました。

斯くして歩く事にはすつかり堪能して、午后はクリケットに打興じ三時五十七分の御殿場發に乘りましたが、國府津から先は大變な人で遂に蒲田まで立通し（二等車の中へ）でありました。平塚邊りでは四つ目の汽車にやつと乘れたといふ叔母さんも居ました。藤澤では最終の列車にも乘れずに一泊した人もあつたといふ事を後で聞きました。兎に角大したものであります。

（一五・四・三〇）

山岳部報告（十五年三月）

(1) 八方尾根スキー合宿（三、七—一六）於黑菱小舍

參加者　宮城　深谷　小泉　佐藤眞　鈴木　松下　折下（部外）野田（同）

七日夜K・S・S・M・の豫專組が先發す。M・F の本科組は十日出發する。本年は初心者の人が春山に多く參加したので合宿をやる事になつたが、あまり同じ乘鞍でやるのも如何かと思はれたので、場所を變へて見た。烈風のため雪質は餘り良い方ではなかつたのであるが、練習は毎日猛烈にやつた。御蔭で新しい人も仲々上達した。十三日、部員全部唐松岳に登頂す。

(2) 德澤小舍生活（三、一〇—二一）船本　日江井　久保

槍をやるY・N・Tの三名と共に入山。例年に比して雪少く、割合樂に德澤に入る。小屋には未だ誰も來て居ない。西山老人のみ爐邊に煙草をふかしてゐた。十三日晴れたが上へ行く前記三名のため横尾まで荷上げを手傳ふ。十四日奥又白經由にて前穂登頂の豫定であつたが、この日より吹雪だし、十七日まで小舍に閉ぢこめられてしまつた。退屈のまゝ小舍を出て附近を散歩するが、少時にして雪達摩になつて小舍に逃歸る。十八日は快晴、三時過ぎ小舍を出て眞暗な奥又白本谷を登る。ルンゼを登る頃より風が吹きだし、次第に強くなる。池に出る頃は飛ばされ相な烈風となり、寒氣もひどく池に一時間半ばかり、風止を待つたが風ぐ見込無く遂に退却と決す。日數に餘裕なきため翌日下山す。

(3) 横尾本谷より槍ヶ岳（三、一〇—二七）山田　根本　高野

十三日小舍班と共に横尾岩小舍前にBCを建設したが、翌日から吹雪となり十六日まで滯在。十七日はキレット出合まで荷上げを行ふ。最初この行の目標は、CIを南岳と大喰との中間より出る尾根に設け、稜線に雪洞を掘り、小槍をねらふ豫定であつたが、BC滯在中三人共激しい風邪にやられ、高野は十九日下山したため後二人でやる事になつた。十九日CIに着く。廿一日稜線に雪洞を掘る。雪洞も仲々感じよく出來あがり、漸く登攀に一歩近づいたと喜んだが、次の廿二日は吹雪、廿三日も天候良い方でないので、小槍は食糧の加減で斷念し、大槍に登り猛吹雪を衝いてCIに退却す。二十四日德澤に下つた。今一歩といふ所で甚だ殘念であつたが、致し方ない。（詳細は本文を御參照下さい）

○昭和十五年度委員

本科代表　大塚　武（本三）
庶務　深谷光茂（本二）
會計　宮城恭一（本二）
記錄　山田亮三（本一）
圖書　久保孝一郎（本一）
器具　根本　大（本一）
豫科委員長　高野秀男（豫二）
會計　松下順吉（豫二）
專門部委員長　清水一郎（專二）
會計　鈴木肇（專二）

記錄

○六甲山スキー行　小谷部

二、八　晴　阪急六甲道—ケーブル頂上

一昨日の降雪で急に行き度くなり、會社をさぼつて出掛けた所意外に良い雪で體が痛くなる迄滑りまくつた。サボリ組が大勢來て居たが、熱心家と見えて日曜のスキー場あたりよりも上手なのが多かつた。ゲレンデは例のゴルフリンクである。

○箱館山　小谷部

二、一七—一八

今度は歸途赤坂山コースなる所を降つたが、傾斜緩く初心者向に好いと思つた。

○妙見、蘇夫岳　小谷部　外二名

三、一六　大阪—八鹿—(ハイヤー)—橋色—日畑泊

三、一七　日畑發(七、三〇)—妙見部落—妙見、蘇夫間の尾根(九、五〇)—金山峠小舍(一一、〇〇—一二、三〇)—蘇夫岳(一、五〇)—栗須野(三、三〇)—江原驛迄バス

近來になく、寒氣嚴しく素晴しい新雪にまるで冬の信州の樣な感じだつた。蘇夫の下りは尾根が狹く雪崩の危險が少しあるが相當スキーを堪能できる。

○湯澤スキー行　三月廿三日—四日　望月　他九名

昨年暮れに土樽で左足を傷めてから、はじめてのスキー行。布場ゲレンデにて終日遊んだ。これで今シーズンは始めと終りにスキーを穿いただけとなつて了つた。

○九鬼山附近　四月三日　望月　他二名

午前十時半猿橋で汽車を下り、直ぐ南の山路に入る。道を間違えて尾根へ出る迄藪漕ぎをし、一汗かいた。岩場のある峰で晝食をとる頃からポツ〳〵やつてきたので、馬立山を越えてからサツカネ峠へは出ず、西尾根を眞直ぐ降りて田野倉に下つた。九鬼山は雨に煙り田野倉の村には櫻がポツ〳〵咲きはじめてゐた。

○倉嶽山　四月七日　中川孫一

桂川の南岸に位し、鳥澤驛を中に挾んで彼の有名な扇山と相對する九九〇米の峯、二等三角點が展望の大きさを裏書する。北から南へ川の字なりに麻生權現連嶺、倉嶽連丘、丹澤山塊と併行してゐる上に、東は陣場、景信、高尾の相武國境山波が丁字型に立ち寒がり、其間を桂川が蛇行してゐる特異の眺望は實にすばらしい。春雪に輝く富士も立派だつたが、前々日に降つた雪が南側にも豐富に殘つて居てそぞろに早春山行の氣分を滿喫した。時局型ハイカーの影も稀に一日の輕い山歩きには是非御勸めしたい所だ。

○和田峠　四月廿五日　望月　他八名

上野原(一〇、〇〇)—和田(〇、二五—一、〇〇)—和田峠(一、四〇)—醍醐峠(三、〇〇)—和田—下岩—上野原(五、二〇)

暖い春の陽をうけて和田峠に遊ぶ。陣場山には人が多そうだが峠以西は餘り人影がない。峠の西の突起(高岩山)でお茶を沸し、ゆつくり新綠を滿喫して、醍醐丸の下から降つた。會社の連中をつれて、月に一、二度こんな小さな丘歩きをしてゐるが人の行かない處を求めてゐれば、僅か一日の輕い山歩きでも、結構靜かなところがあるものである。

消息

奥野綱重君(勤先變更)　新潟合同運送株式會社
(住所)　新潟市白山浦一丁目二三六

柿原謙一君(通信先變更)　赤坂區檜町、加藤部隊小島秀隊

原鐵三郎君(住所)　愛媛縣新居濱市金子、住友成簀寮内

本年度會費御納め下さい

在京會員(六圓)　地方會員(三圓)